

第25回

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

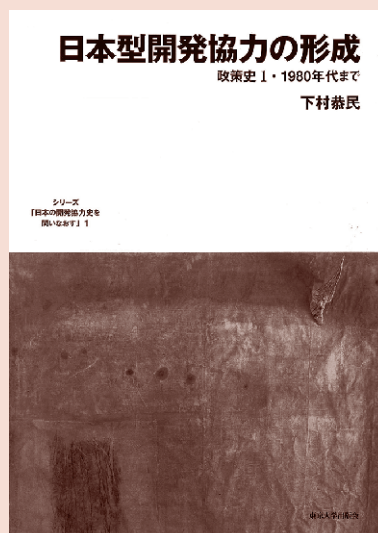
一般財団法人 国際開発機構 FASiD

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第25回(2021年度)の受賞作品が下記の通り決定しましたのでご紹介します。



国家の「余白」
下條 尚志 著



日本型開発協力の形成
下村 恭民 著

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著 『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
- 第2回 原 洋之介著 『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著 『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
- 第2回 深川由起子著 『韓国・先進国経済論－成熟過程のミクロ分析－』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著 『中国経済発展論』有斐閣 1999年
- 第3回 辻村英之著 『南部アフリカの農村協同組合－構造調整政策下における役割と育成－』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著 『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著 『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 第5回 西川 潤著 『人間のための経済学－開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著 『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 第6回 脇村孝平著 『飢饉・疫病・植民地統治－開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著 『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著 『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 第8回 安原 毅著 『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著 『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著 『村の暮らしと砒素汚染－バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著 『牧畜二重経済の人類学－ケニア・サンプルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著 『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著 『現代アフリカの紛争と国家－ポストコロナル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著 『カーストと平等性－インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著 『経済大国インドネシア－21世紀の成長条件』中央公論新社 2011年
- 第17回 森 壮也・山形辰史著 『障害と開発の実証分析－社会モデルの観点から』勁草書房 2013年
- 第17回 山尾 大著 『紛争と国家建設－戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店 2013年
- 第18回 柳澤 悠著 『現代インド経済－発展の淵源・軌跡・展望』名古屋大学出版会 2014年
- 第19回 古川光明著 『国際援助システムとアフリカ－ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』日本評論社 2014年
- 第20回 宮城大蔵編著 『戦後日本のアジア外交』ミネルヴァ書房 2015年
- 第21回 田中由美子著 『「近代化」は女性の地位をどう変えたか－タンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷』新評論 2016年
- 第21回 佐藤 仁著 『野蠻から生存の開発論－越境する援助のデザイン』ミネルヴァ書房 2016年
- 第22回 堀江未央著 『娘たちのいない村－ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』京都大学学術出版会 2018年
- 第23回 友松夕香著 『サバンナのジェンダー－西アフリカ農村経済の民族誌』明石書店 2019年
- 第24回 谷口美代子著 『平和構築を支援する－ミンダナオ紛争と和平への道』名古屋大学出版会 2020年

審査委員選評

「国家の余白」～このタイトルにひかれて本書を読んだ読者は多いのではないかと。著者が定義する「国家の余白」とは、「大都市に近く一定の人口を持ち農業生産が行われているにも関わらず、国家の力が及ばないままローカルな秩序が保たれている空間」だ。

著者は、メコンデルタ南部の多民族社会フータン村に1年4か月住み込み、役人から庶民までを対象に聞き取り調査をする中でそのような空間の存在に気付いた。インドシナ戦争、ベトナム戦争、社会主義、ドイモイ、ベトナム・カンボジア国境紛争など大きな歴史のうねりの中で、「国家が介入しにくい空間」が存在し、人々はそこでローカルな秩序を作り上げ、生き残りを図ってきたのだ。動乱の中でしたたかに生きる人々の心理と行動を、文献レビューとオーラルヒストリーの手法で描き出した本書は、大河小説の趣すらある。

「国家の余白」という概念には新規性があり、その視座からは新しい光景が見えてくる。ソマリアでは政府の権力の及ぶ範囲は首都周辺の数平方キロに限られ、国家のほとんどが「余白」だ。アフガニスタンでも、軍閥が割拠して紛争が続き、政府の権力、サービスはカブール近郊に限られ、「国家の余白」で暮らす人々は、国内避難民を含め、はるかに多い。そのような空間で人々がいかに生きているかを理解する上で、本書のアプローチは役立つ。

「国家の空白」地帯は「閉ざされた空間」ではなく、流動性の高い地帯でもある。人々は紛争を逃れて外国に難民として流出することもあれば、経済的機会を求める移民が流入することもある。「国家の空白」は移民、強制移動研究にも新しい視点を提供する。

このように本書は独自の視座に立った研究書で、学術的な価値が高いが、実践的価値もある。援助の計画と実践において「国家の余白」を否応なしに意識せざるを得なくなる。国家の権力が及ばない、流動性の高い地域への外部からの支援はどうあるべきだろうか？それに対して本書はヒントを提供する。

本書は大著だが、文章は読みやすく、写真などによって現地の様子もわかり易い。「国家の空白」という主題を繰り返すことによって著者の主張が可視化されている。研究者だけでなく、実務家、大学院生にも良き参考文献となるだろう。大来賞にふさわしい、若手研究者による力作であって、外国にも紹介されるべき作品である。
(滝澤 三郎)

受賞者の言葉

この度は歴史ある大来賞を頂き、大変ありがたく光栄に存じます。審査員の先生方、お世話になった先生方、本書の編集・校正とご推薦をして頂いた京都大学学術出版会の方々、そして本書を出版するまでに様々なご支援と激励を頂いた皆様には、深く御礼申し上げます。

本書は、ベトナム南部メコンデルタにおいてクメール人、華人、ベト(キン)人の民族的混濁が顕著に進んできた地域社会を対象に、人類学的な長期現地調査を通じて20世紀以降の人々の歴史経験と現在について検討したものです。植民地化と脱植民地化、その後の国際戦争、社会主義政策、市場経済化を背景とするナショナルかつグローバルな変革の圧力(広く捉えれば開発)に対し、地域社会の人々がどのようにローカルな秩序を再編成し、生き残りを図ってきたのかについて、徴兵忌避やインフォーマルな経済活動、移民難民といった諸問題に着目して考察しました。こうした諸問題を考えることを通じて、徴兵逃れの仏教寺院や闇市、非合法越境ルートなど、国家の介入しにくい空間が次々と生成されてゆく過程、そしてそうした空間が人々の生き残りに不可欠な場となっていたことを論じました。

私の研究は、「ベトナム戦争と社会主義のなかで、その状況に置かれた市井の人々はどう生きてきたのか」という学部時代の素朴な疑問から始まりました。それから現在に至るまで、ローカルな次元で人々が経験した「小さな歴史」から、いかにナショナル、グローバルな規模で展開された「大きな歴史」を問い直していくのか、また長期フィールドワークを通じて、民族誌のようにいかにして現在のみならず過去を再構成することができるのかという問題意識を抱き続けてきました。自身に課してきたこの問題は、いまだ問い続けているテーマなのですが、本書はさしあたりの私の考えを展開した内容となっています。

ベトナム戦争や社会主義は、もうだいぶ昔に起こったことですので、私の世代で関心を持っている人は多くありません。ただ、この戦争と社会主義を経験した私の調査村で起こってきたことは、冷戦終結以降に加速化したグローバル経済や移民難民の動態、さらには、こうした世界の人・モノ・情報の動きが一瞬にして制御されたコロナ禍の現在を考えるうえで、多くの示唆を与えると確信しています。

同時に、ベトナム戦争を契機に活発に議論されたモラル・エコノミー(と合理的農民論)やナショナリズムの問題は現在、姿形を変えて再び注目されるようになってきているようにも思います。私の力不足により本書では、これらの古典的なテーマを、より現代的かつグローバルな議論へと発展させることができずでしたが、今後も、私たちが今日の当たり前に行っている分断や軋轢の背景を深く理解し、自身と考えが異なる他者と交渉や調整をする糸口を示すことができるような研究に取り組んでいきたいと考えております。

国際開発の分野とは距離があるように思われる本書が大来賞を受賞することができたのは奇跡的なことですが、異分野の研究者の方々に本書の議論が伝わったことは、大変嬉しく思っております。あらためて、このような貴重な賞を頂きましたこと、関係者の方々に感謝を申し上げます。

下條 尚志



しもじょう ひさし

神戸大学大学院国際文化学研究所准教授。1984年東京都生まれ。2007年度慶應義塾大学経済学部卒。2015年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(地域研究)。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員(2015～2016年)、京都大学東南アジア地域研究研究所機関研究員(2016～2017年)、静岡県立大学大学院国際関係学研究所助教(2017～2021年)。

主要著書

「ベトナム南部メコンデルタ」共編著『東南アジア上座部仏教への招待』風響社、2021.10。「ベトナム—カンボジア国境の越境移動をめぐるローカルな政治—冷戦終結後メコンデルタのクメール人越境者とベトナム国家」『アジア・アフリカ言語文化研究』95号、2018.3。『戦争と難民—メコンデルタ多民族社会のオーラル・ヒストリー(ブックレット「アジアを学ぼう」42)』風響社、2016.10。

“Local Politics in the Migration between Vietnam and Cambodia: Mobility in a Multi-Ethnic Society in the Mekong Delta since 1975.” *Southeast Asian Studies* 10 (1), pp.89-118, April 2021. “From “Ideal Social Model” to Reality: Vietnamese Studies in Japan.” *The Journal of Vietnamese Studies* 16 (1), pp.4-47, February 2021.

第25回 応募作品の傾向と選考経緯

2020年4月から2021年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、53作品の推薦・応募があった。

本年度は対象地域としてはアジア地域を取扱う作品は引き続き多く、半数以上であった。そのうち中国関係は3作であり減少傾向が続いている。アフリカ地域を取り上げたものは6作で、昨年より増加した。コーカサス(紛争)、ボスニア(ジェノサイド)、チベット(難民)等、様々な地域の研究成果が寄せられた。

FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作に加えて下記3作を最終審査対象として選出した。審査者からは「今年度は例年以上に大来賞に相応しい、水準の高い作品が多かった。本審査対象5作品は、いずれも読み応えのある力作であった。国際情勢を反映して、近年は紛争関係をテーマとする著作が増加しているが、この分野の良書が多かったことが本年の特徴となった。」との総評が出された。審査過程における委員による意見はおおよそ以下のとおりである。(書名五十音順)

『インドの金融発展—経済成長と貧困削減に向けた銀行部門の役割』(井上武著、晃洋書房)は、インドにおける銀行部門全体に焦点をあてて、金融の経済発展に対する役割を金融深化と金融包摂の視点から解明している。経済成長と貧困削減への影響を分析した研究は少なく、銀行部門が果たした役割を理解するうえで、有益な知見を提供している。

審査委員選評

本書は、「日本の開発協力の歴史を政策決定、意思決定の歴史として描く」ことを目指したものである。筆者において、このテーマにこれだけの情熱を持って取り組むことのできる人を思い浮かべることができない。欧米諸国が主導してきた「国際開発規範」とは大きく異なるわが国開発協力の「異質さ」を、途上国側のイニシアティブを尊重する「顧客志向型」開発協力モデルとして描き出した。今後、本書に対する異論や補論、さまざまなレベルでの批判や逆にデータ等を補強した研究が生まれ出ることが期待できる、刺激的な作品である。例えば、「武器輸出なきトップドナー」になりえたとする議論や、日本の開発協力が追求してきたのは「ODAによるインフラ整備・直接投資を通じた輸出入工業化支援・輸入促進（市場開放）の三位一体型」開発協力による発展途上国の「経済自立」＝「援助依存からの卒業」であった、等の議論は蒙を開かれる思いがすると同時に、なお一層議論の余地のある仮説であると思われる。

本書は、わが国の開発協力政策の形成と展開を戦後史という文脈の中に位置づけて描き出した初めての試みであり、この点に本書の意義と魅力がある。戦後史の中に位置づけたことによって、わが国の開発協力を一個の歴史的個性をもった事例として描きだすことに成功した。今後、長きにわたって参照基準となるような自画像的な作品である。また逆説的ではあるが、そのことによってDACを軸に形成されてきた「援助（開発協力）」のあり方を相対化して再検討する可能性がうみだされた、あるいは開発協力の多様なあり方（オールタナティブ）の可能性を示唆する作品になったといえよう。

なお本書は、「被援助国であった日本が世界最大の援助国となるまでの期間を対象」としたもので、1980年代末までをとりあつかっている。「1990年代以降」をとりあつかう『最大のドナーの登場とその後ー政策史2』の出版が予定されており、その出版が待ち望まれるが、本審査委員会では本書をそれ自身で完結した作品として評価した。筆者も本書の「あとがき」で、「険しい道を何とかゴールにたどりつくことができない」と記しており、本書を完結した作品としてみなしていると思われるからである。最後になったが、このようなすぐれた作品を世に送り出してくれた筆者に心からの敬意を払いたい。

(絵所 秀紀)

受賞者の言葉

この度は国際開発研究大来賞を戴き、大変光栄なことと感じています。もう50年近く前の話になりますが、海外経済協力基金で大来佐武郎先生にお仕えした（といっても総裁とヒラ職員の関係ですが）時代を回想し、改めて先生を記念する賞の重みを受け止めています。

審査委員の方々が本書のメッセージを取り上げていただいたことに深く感謝します。また、執筆の過程で、ブレインストーミングやインタビューを通じて、貴重な視点を気づかせて下さった多くの方々、そして、終始きめこまかいご支援をいただいた、東京大学出版会とJICA 緒方貞子平和開発研究所の方々に、心からお礼を申し上げます。執筆しながら途上国での多くの人々との出会いを思い返し、彼らから学んだ貴重な「智恵」の数々を盛り込むことに努めました。

この本が取り組んだのは日本の開発協力（ODA 以外の多様な協力を含みます）の政策史です。開発協力の中心にあるのは途上国の底辺や草の根の人々であり、研究の焦点もこの人々に当てられます。ただ、彼らの現状改善の試みが、「どこか遠い所で、だれかが、何かを決定した」ことによって、大きく影響されることも事実です。底辺や草の根での支援のあり方を考えるうえで、「どこで、だれが、何を、なぜ決定したのか」、つまり政策決定過程や決定の動因は大きな意味を持ちますが、これまで掘り下げた研究が十分だったとはいえません。その空白を少しでも埋めることを、本書のミッションとしています。

本書では、敗戦直後の混乱の時代から、日本がトップドナーとなるまでの約45年を辿ります。開発協力の視点から描く日本の現代史の試みともいえます。実際に辿ってみて、定説や常識と異なる事実、以下のような「謎」に満ちていることに驚かされました。

「敗戦直後の廃墟の日本が、なぜ経済協力を開始しようとしたのか」「自助努力は、本当に日本独特の理念なのか」「高く評価された『福田ドクトリン』は、なぜ東南アジアの対日批判を鎮静化できなかったのか」「あれほど激しかった東南アジアの対日批判が、なぜ1990年ごろ突然消えたのか」

「謎」解きに取り組む中で、日本の開発協力の色々な特色が浮かび上がりました。その中核と思われる、東アジアの開発経験が凝縮された特色が、「途上国の輸出工業化への支援」「そのためのODA、直接投資、製品輸入の有機的連携」、つまり「三位一体型」開発協力モデルです。本書で注目したのは、このモデルの原型が、1980年代の激しい対日批判の中で、ASEAN 諸国から日本に提示された要求だったという事実でした。日本型開発協力の形成過程は、ASEAN 諸国の智恵に学ぶ学習過程でもあったのです。協力の「顧客」である途上国の考えを生かそうとする、「顧客志向型」の対応ともいえます。

国際援助コミュニティの正統から見れば「異質」でありながら、アフリカ諸国を含めた多くの途上国によって追求されているのは、これが途上国由来（「顧客志向」）の開発協力モデルだからでしょう。

日本の開発協力の軌跡を辿って、多くの驚きやヒントに出会いました。今回の受賞に励まされて、過ぎた時代の結果でありながら、新しい時代の前触れでもある、さまざまなものを掘り起こしていきたいと思っています。

下村 恭民



しもむら やすたみ

法政大学名誉教授。1940年生まれ。慶応義塾大学経済学部卒、コロンビア大学MBA。大手メーカー勤務を経て海外経済協力基金（現・国際協力機構）に入り、インドネシア、インド、タイに駐在、経済部長。国際協力銀行監事。埼玉大学教授。政策研究大学院大学教授、法政大学教授、法政大学大学院環境マネジメント研究科長。

主要著書

『開発援助政策』日本経済評論社、2011。『国際協力』共著、有斐閣、第2版：2009。『開発援助の経済学』共著、有斐閣、第4版：2009。『中国の対外援助』共編著、日本経済評論社、2013。『貧困問題とは何であるか「開発学への新しい道」』共編著、勁草書房、2009。『ODA大綱の政治経済学』共著、有斐閣、1999。Japan's Development Assistance: Foreign Aid and the Post-2015 Agenda, (eds.) Palgrave Macmillan, 2016. A Study of China's Foreign Aid - An Asian Perspective, (eds.) Palgrave Macmillan, 2013. The Rise of Asian Donors: Japan's Impact on the Evolution of Emerging Donors, (eds.) Routledge, 2013. The Role of Governance in Asia, (ed.) Institute of Southeast Asian Studies, 2004. 他

『グローバル経済統合と地域集積 ー循環、成長、格差のメカニズム』（高阪 章 著、日本経済新聞出版）は、グローバル経済統合と新興国・途上国の経済発展のダイナミクスを包括的に分析した力作である。成長だけでなく所得分配をも総合的に理解するというアプローチは、きわめて重要である。

『コーカサスの紛争 ーゆれ動く国家と民族』（富樫 耕介 著、東洋書店新社）は、コーカサスにおける様々な紛争の原因・経過・結果を丁寧に解きほぐし、単に「支配的民族と少数民族の対立」という図式では理解できない点を明らかにしている。非常に中身の濃い著作であり、読後の学びも深い。

【第25回（2021年度）審査委員会】 委員長 杉下 恒夫（FASID 理事長）
委員 絵所 秀紀（法政大学名誉教授）
大野 泉（政策研究大学院大学教授）
北野 尚宏（早稲田大学理工学術院国際理工学センター教授）
滝澤 三郎（東洋英和女学院大学名誉教授 ケア・インターナショナル・ジャパン 副理事長）
藤田 伸子（FASID 専務理事）

第26回

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

募

集

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。第26回(2022年度)についても、皆様からのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

- (1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの(翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く)。
- (2) 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。
- (3) 2021年4月から2022年3月迄に、初版が国内で市販されたもの。

審査・表彰

表彰 審査委員会で選考された作品に対し、正賞(楯)と副賞(50万円)を贈呈します。

審査 当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

推薦・応募 推薦者(自薦・他薦可)は、所定の「推薦書」へ入力し、email添付にて送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦してください。なお、推薦書類・当該図書は返却致しませんのであらかじめご了承ください。

締切 2022年5月末頃

受賞作品の発表と表彰式 2022年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式を行います。(予定)

推薦書ダウンロード・推薦・お問合せ先 下記事務局へお送り下さい。 https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/2_index_detail.php

第25回 表彰式・記念講演会のご案内

案内状 https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/3_index_detail.php

2022年1月13日(木) 13:00～

ローカルな秩序の作り方

ーメコンデルタの人々の生き残る術から考える近代 下條 尚志

ベトナム戦争と戦後の社会主義政策の下、国家による集住化、暴力、兵役、農業集団化に対し、メコンデルタ多民族社会の人々は、徴兵忌避や闇経済、カンボジアへの非合法越境ルートなどの「国家の介入しにくい空間」を生成していました。民族的混濁性や移動性の高さ、国境の外側と結びついた宗教や経済など、国家にとって捉えどころがなく統治しにくい要素が混在する地域を国家の「余白」とし、そこが、人間の生存にとっての危機的な状況を改善したり調整したりする「余地」が人々の手に残された場でもあったことについてお話します。

異質ということ

ー日本型開発協力の形成過程とその政策含意 下村 恭民

日本の開発協力の歴史を辿ると、国際社会の「正統」と異なるさまざまな特色が現れる。そこには後進性や経験主義の限界だけでなく、新しい知的貢献の苗床となる可能性が秘められている。異質な視点の持つ意義を改めて確認しながら、東アジアの開発経験が凝縮された日本の開発協力の軌跡を読み直し、過ぎた時間が生んだ結果とともに、新しい時代の前触れを探ってみたい。

参加無料(要申込み)

会場 ハイブリッド式 オンラインzoomによる参加者のみ募集します

申込み オンラインフォームからお申込みください

締切 2022年1月6日(木) 定員60名程(定員に達した時点で受付を終了します)

大来 佐武郎(おおきた さぶろう) 氏
一九一四年旧満州大連市に生まれる。一九三七年東京帝国大学工学部卒業、通信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。一九六三年に同庁総合開発局長退官、一九六四年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会(ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会)の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。一九七一年国際開発センター理事長、一九七三年海外経済協力基金総裁等を歴任、一九七九年の大平政権において外務大臣を務める(七八〇年)。その後国際開発大学学長、対外経済問題諮問委員会会長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。一九九三年逝去。

本事業実施には、公益財団法人 三井住友銀行国際協力財団による助成を受けています。

一般財団法人 国際開発機構
国際開発研究センター
国際開発研究 大来賞 事務局(服部)

〒106-0041 東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階
Foundation for Advanced Studies on International Development
email:okita@fasid.or.jp TEL:03-6809-1997 FAX:03-6809-1387 <http://www.fasid.or.jp>